The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コメント１ ： 『希望（エスポワール）』『われらの詩』における原爆・広島・在日 ： 東アジアの視点から
Author(s)	徐, 潤雅
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 125-132
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コメント１：『希望（エスポワール）』『われらの詩』における原爆・広島・在日
――東アジアの視点から――

徐　　潤　雅

はじめに

コメントを担当する徐潤雅です。富山妙子という画家を追いかけながら、彼女と韓国の民衆美術のかかわりについて調べています。ご存知の方もいらっしゃるかも知れませんが、少し富山妙子について紹介させてください。

富山妙子は、1921年に神戸に生まれ、旧満州で育ち、1938年、女子美術専門学校への進学をきっかけに、ハルビンから東京へ移り、それから東京を拠点に活動しております。1970年頃から積極的に韓国問題を含め歴史を題材にした絵を描いてきた画家として知られておりますが、1950年代は炭鉱を描いたこともあり、他にも多くの執筆と市民運動をする傍ら、絵本のイラスト作業も行いました。近年は３・11以後の福島原発をテーマに作品を作っており、現役の画家として今年（2013年）も展覧会を開きました。私は、ソウルで富山妙子を知った時、まだ富山の作品も見ていなかったのに、「この人は何だろう…」、「なぜ韓国の政治なんかに関心をもったのか。その作品はどのように描かれたのか…」がとても気になりました。その後、富山妙子を追いかける中で、初めて知る歴史や社会的状況などが次々と出てきました。しかしその歴史的背景や状況を消化しきれておらず、私自身がもともと持っていた日本と韓国の現代史のイメージを、まず崩さなければならないことをつくづく感じております。

ところで、今日の会では1950年前後の東アジアと日本と広島を念頭に入れつつ、『希望（エスポワール）』と『われらの詩』という雑誌を通して、当時の人びとに出会うことができれば、と思いますが、それは簡単にはできないのだな、とコメントを準備する中でつくづく感じました。ですが、やはり1950年代は、東アジアにおいて重要な時期であり、今まであまり意識されてこなかった東アジアの文化（運動）的な流れとつながりに、今回の企画で少しでも迫っていければと思います。そういった意味で、二つの復刻版が出版され、手軽に接することができるようになったことは、とてもありがたいことだと感じます。

それでは、ご報告と関連付けながら、コメントに移りたいと思います。

１．解放空間にみる原爆・広島・在日

今回コメントを準備しながら「戦後」について考えたとき、私は引っかかることが一点ありました。日本では1945年の敗戦から後を戦後といいますが、韓国で「戦争」というと朝鮮戦争を思い出しますので、「戦後」というと当然のように朝鮮戦争の後がまず私の頭にありました。そこで白元淡（2008：31）を参照しながら、朝鮮の解放空間における戦後について考えたいと思います。韓国では解放後から1948年までを指して「解放空間」と表現しており、戦後という概念はやや日本的な意味が強いと批判される可能性があると白元淡はいいます。しかし、彼女はそれにもかかわらず、「戦後とは世界的な冷戦体制の構築期」であることに注目し、冷戦構造が中国内戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争などの熱戦の連続によって「絶えず再現される戦後」（傍点―引用者）として捉える必要があると指摘しております。

帝国日本から突然解放された朝鮮がアメリカとソ連にそれぞれ占領され、朝鮮戦争にいたるまでの時期、解放空間では、どのような動きがあり、人々は社会の空気をどう感じていたでしょうか。また、当時の朝鮮では、原爆はいかなるものとして受け止められていたでしょうか。今すぐそこまで手を伸ばすには力不足を感じますので、とりあえず、国史編纂委員会韓国史データベースにまとめられた年表を参考に、1945年解放後から1950年まで、38度線以南地域の状況を概観してみました。ただし、これはあくまでも韓国政府の立場から整理されたもので、共和国、アメリカやソ連の視点は排除されています。

まず、政治的に統治体制が不安定なまま、社会の空気は落ち着かず、人々の動きからも慌しさが伝わってきます。単独政府を樹立しようとする李承晩らと、それに反対する勢力の動き（単政反対デモ）が交差しているのは周知の通りだと思います。それに加え物価が暴騰しました。1946年12月の物価は1945年８月15日より30倍高くなりました。米の値段は1950年２月の時点で、解放当時より50倍以上も上昇しています。日本が残した産業現場における紛争やストライキの記事も目立ちます。その傍ら、ビラを撒いていた中学生が警官に銃殺されるなど、新たに登場した国家権力による抑圧的な雰囲気も伝わってきます。ソウルの人口が爆発的に増加するなど、人の移動が集中的に行われていることや、ハングル教育のためさまざま対策を急ぐ動きが印象的です。また、発電所や産業基盤が朝鮮半島北部に集中していたため、電気などを送ってもらう南部は、徐々にアメリカを経済的拠り所としていくなかで、北との関係がますます悪化していく様子もうかがえました。

朝鮮人が解放の瞬間を迎えた時に、実際どのような心情を抱いていたかは、気になるところですが、現在の私としては、記録映像でみたイメージ、つまり「大韓独立万歳！」を叫ぶ白い韓服の朝鮮人の姿や「解放の喜び」といった纏まった表現しか考える根拠を持っ

ていません。不十分ではありますが、以上で述べました破片的なイメージと情報から描きだせることは、混乱と生活苦の中でも喜びや明るさが混在する社会です。

それでは、このような解放空間の朝鮮で、原爆はどのように認識されていたでしょうか。韓国で解放は、当然「民族の喜ばしい出来事」として学びます。したがって、原爆は解放をもたらしたものでもありますので、多くの韓国人が「広島」や「原爆」を考えるときは、どのように考えればよいかと混乱を感じると思います。「原爆のおかげで」「アメリカに助けられて」といった言説が現在の韓国社会で根強く働いていることも確かな事実です。だからこそ、韓国においてそのような原爆言説を批判的に考える作業は重要であると言えるでしょう。

それでは、原爆と広島と在日をキーワードに、今日のテーマに関わって話を進めたいと思います。その際、解放空間における原爆問題と関連して玄武岩（2013）の論考は注目に値します。彼は「韓国における「反核思想」は「広島」を見落としたまま、分断と反共主義、「反日」の脱植民地的課題、民主化と統一運動の中で「一国平和主義」として形成された」（玄武岩、2013）と「韓国反戦平和思想的限界」を指摘しながら、朝鮮戦争勃発の半年前くらいに翻訳出版された二冊の本を取り上げ、広島への共感の痕跡を浮き彫りにしています。アメリカのジャーナリスト、ジョン・ハーシーによる『ヒロシマ』と永井隆によるエッセー『長崎の鐘』がそれです。この二冊の本は日本でそれぞれ1949年に出版されましたが、日本での出版のわずか数か月後という時間差で韓国でも翻訳が出版され、反響を呼びました。同年12月に出版された『ヒロシマ』の場合、二つの出版社からほぼ同時に出版されました。一方、『長崎の鐘』も同年の８月に初版が出され、当時の新聞には「原子弾は第二次世界大戦を終結させた！（中略）もし第三次大戦を惹起するとしたら、それまた原子弾であろう（中略）解放後最大のベストセラーを見よ！」という文句とともに広告が掲載されました（図版１参照、1950年２月には７版発行）。

▲図版１『長崎の鐘』新聞広告。京郷新聞1949年12月７日。

玄武岩は、この論考で、朝鮮戦争の休戦後である1955年の『原子弾物語』（シンジ社編集部編）も紹介しており、朝鮮戦争後の「「戦争の文化」（ジョン・ダワー）が充満している状況でも植民地支配の苦痛と恨みを超えて「広島」へ共感しようとした」と、広島に対し心を寄せていた朝鮮人の様子に光を当てています。

しかし、玄武岩の論考では、以上の三冊に在日朝鮮人（在日本同胞）についても叙述されているどうかは確認できません。1949年と1955年に発行された翻訳書の実物を確認す

ることはできませんでしたが、管見の限り、在日の問題と関係付けて原爆を考えるような痕跡は見つかりませんでした。

一方、解放空間の朝鮮で、在日朝鮮人（特に在広島の朝鮮人）はどのように認識されていたかを知るために、広島や原爆の被害や在日本の同胞に関する当時の新聞記事を調べてみました（Naver News Library使用）。その結果、広島や長崎が、当時も開発と実験が現在進行形で進んでいた原子爆弾の威力を語るとき必ず呼び出される記号としてあったことは確認できましたが、上述の出版物が訴えるような危機感を新聞記事から感じ取ることはできませんでした。

それから、在日朝鮮人に注目しその現状を把握しようとする記事は1947年に初めて登場しますが、それもとても簡単な内容です。在日朝鮮人の居住地と性比とともに「倭政下で経営していた仕事を整理中」であると報告する記事が複数ありました（「日政府に登録された朝鮮人53万」『東亜日報』1947年11月11日２面など）。1949年になると民団による調査報告が記事化（「民団が調査した在日同胞」『東亜日報』1949年２月15日２面）される程度で、“日本に戻る朝鮮人”や“日本で被爆した朝鮮人”“日本から帰国ができなかった朝鮮人”などの事情にフォーカスを当てた記事は管見の限り皆無でした。

ここまでが手さぐりで分かった解放空間としての朝鮮における広島・原爆・在日朝鮮人の認識です。今回は不十分な調査しかできませんでしたが、もし機会があれば朝鮮における原爆認識の変遷を解放空間から現在まで綿密に辿ってみる作業をやってみたいと思いました。

２．感想と質問

以上のような考察を踏まえながら、『希望』と『われらの詩』にもどりますと、朝鮮半島で見落とされていた在日朝鮮人（在日化されつつある朝鮮人）が、『われらの詩』の中で、その姿を現していることはとても重要だと思います。また、広島から東京へ拠点を移した『希望』の場合、在日朝鮮人はどのように関わっていたかが気になります。在日朝鮮人が『われらの詩』に登場することには、おそらく広島という場所に重要なヒントがあると察しますが、具体的にどのようなものだったのか、さらに勉強していきたいと思いました。

それではまず、鳥羽耕史さんの報告された『希望』から始めさせていただきます。報告を聞いて原爆というルーツを持つ若い世代の「現在とこれから」に対する格闘が伝わるようでした。河本英三を中心に「原爆を意識的契機」（河本）としながら、広島から東京へというふうに、活動の拠点がかわり、後にはアメリカまで繋がっていったようですね。面白かったのは、点と点としてあったそれぞれの場所が、『希望』を媒介に、関わりの輪を重ねながら続いていったことです。また、核実験や原子力の「平和的利用」といった世界

的変動とも不可分ではなかったことも示していただいたと思います。

二点、質問いたします。一点目は、書き手についてです。『われらの詩』より少し早めに創刊された『希望』は、おっしゃった通りに『われらの詩』より「原爆の影」が薄いですし、「明るく」「楽観的」であるような印象も持ちます。それは、書き手の経験（とりわけ原爆経験）の違い、階級的な違いなど、『希望』の筆者たちと『われらの詩』の書き手たちは、ずいぶん立場の違う人々だったことによるのではないでしょうか。それが雑誌の性格の違いを作った大きな理由ではないでしょうか。

二点目は、「毛沢東主義に深く影響された『人民文学』的な方向でもなく、占領期を経て大量に輸入された（中略）アメリカ文化を礼賛する方向でもなく、そしてまたシュルレアリスムやレジスタンスの根拠地としてのフランスに傾倒する方向でもない、重層的なものがこの雑誌には含まれている」とおっしゃいましたが、「重層的」ということの意味とそれがなぜ可能だったのかについて、もう少し具体的に知りたいと思いました。なぜなら、当時の日本の知識人にとって、中国革命はとても魅力的だったようだからです。たとえば、孫歌（2012：40）によると「当時の特定歴史状況のもと、中国が示した、ソ連とは異なる、寛容で、平等で、自由化とすらいえる傾向は、日本の様々な陣営の知識人に重視された。左翼共産党陣営やリベラリズム左派の間では、ほとんど絶対的に近い肯定を受けた」といいます。『希望』の河本英三らは、共産党とは一線を画していたので、リベラルな知識人に含まれると思います。私が追いかけている富山妙子も、共産党に入党したことはありませんが、中国革命にとても熱い気持ちを抱き、ヨーロッパから中国へと憧れ/関心の対象が変わっていったと思います。このような現状を踏まえて『希望』が中国革命に偏らず、重層的に存在することができたことの背景が気になりました。

次に、川口隆行さんの報告された『われらの詩』に移りたいと思います。ご報告では、朝鮮戦争と重なる時期に広島で発行された『われらの詩』が含意することについて、作品分析を通して具体的に浮き彫りにしてくださいました。紹介してくださったいくつかの詩しか私には分かりませんが、それを読むと、とても痛々しく感じました。

また、現在の視点から簡単に「広島だから」と当たり前のように片付けてしまうことに対する批判的な態度が感じられました。つまり、広島だから当然、朝鮮戦争における核使用に反対したのだといった思い込みについて批判的に向き合うことを川口さんは要請しておられるように思いました。残された史料やテキストに即して、彼/彼女らが直面していた闘争の現場と朝鮮戦争の緊張感を炙り出し、原爆体験が想起される過程を述べられましたが、その当時の微細な声（ノイズ）を見逃さずに拾い上げることを大切にする川口さんの分析方法にもとても共感しました。

それでは、二点質問させていただきます。一点目は、質問というより、気づいたことで

す。川口さんの報告を聞いて峠三吉らが原爆詩人になっていく過程がわかりました。また、広島の人々が自分（の経験）を表現するようになることの意味について考えさせられました。

とりわけ広島という場所性と関係づけて考えたいと思います。かつて近代化と戦争の波に乗って、重工業や軍事産業都市として存在していたこと、そして戦後、平和の都市「ヒロシマ」へ生まれ変わっていく様子と、人々が自分たちの経験を表現する中で原爆や朝鮮戦争に目覚める様子が重なるところがあると思いました。それは、広島の人々が時代の波に翻弄されるだけではなく、自ら力を得る過程、主体性を獲得していく過程だと考えられると思います。この過程について考える際、丸木夫妻を思い出します。小沢節子さん（2002：55）の書かれた文章から引用しますと、「「原爆の図」の丸木夫妻が戦争協力をしていた」のではなく、同時代の多くの日本人同様、戦争に流され協力していった夫妻が、後に「原爆の図」を描いたのである」といったところですが、広島を考えるときもこのような観点が必要でしょう。

話を『われらの詩』に戻すと、そもそも彼らに表現するよう促したのは何だったのでしょうか。「市民の不安に光を撒き／墓地の沈黙に影を映しながら」（峠三吉「一九五〇年の八月六日」）という部分からうかがわれるように、その筆者たちが感じていた不安は、彼らを動かした一つの重要な要素として考えられます。そしてその不安から「みずから「平和」の意味を問」うていく方向へ動いていったのではないでしょうか。それは外部から「押し付けられた平和」ではなく、生活者として主体的に動きだしたことを意味していると考えてよいのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

二点目は、「原爆投下は、第二次世界大戦の最後の軍事行動というよりも、ソ連との冷たい外交戦に対する最初の大作戦の一つであった」（ブラケット、1951、権赫泰、2008より再引用）というような冷戦認識は、当時広島で朝鮮戦争に危機感を感じていた人々にとって実感できるものだったでしょうか。作品にそれが窺えることもあるでしょうか。

３．国家の集団的記憶形成から零れ落ちる存在

今回の報告から広島にいた人々について考える機会をいただきました。とくに日本と韓国がそれぞれ一国主義のもとで国家建設をしていくなかで零れ落ちる存在について、残された当時の史料から発見していくことの重要性を感じました。

そこで再び韓国の社会に目をむけますと、最近までも原爆に対する無神経的な態度はよく見られ、とても残念だと思います。その理由を考える際に「被爆経験を絶えず外部化し、排除し、日本の経験だけに封じ込めておこうとする」韓国社会の心情を指摘した権赫泰（2008）の論考や、アジアを「地域的心象地理（imaginative geography）」の場として把

握した金イェリム（2008）の論考などが参考になります。金イェリムは韓国が自分を再構築する過程で、植民地の記憶を処分したことによって、在日朝鮮人が韓国の集団的記憶から排除されていったことについて指摘しています。

このように、韓国の認識枠組においては、被爆経験は日本の経験として封じ込められ、在日朝鮮人の存在も排除されたのだとすると、当時広島にいた在日朝鮮人にとってより近い存在だったのは、分断された祖国の人々だったのか、それとも隣り合わせている広島の人々だったのか、という疑問も湧いてきました。

おわりに

コメントを準備しながら、自分の知識の不足さはもとより、読んでも調べても分からないことの多さに圧倒されました。それから、川口さんが紹介してくださった詩を読んでいると、作者の痛みが私の体を通過するような感覚を覚えました。また、日本、韓国、そして東アジアまで広げて考えることの難しさを痛感しました。

大変な作業をほんの少しだけ味わったのですが、戦後の東アジアを見る私自身の視点が少し成長したかもしれません。白元淡（2009：27）は、戦後アジアについて、複数的に存在し、多様な単位で連動しながら作用している、という趣旨のことを述べていますが、アメリカや冷戦構造によって振り回されただけではなく、それに抵抗しつつ東アジアの中から生まれてきた動きについて、さらに注目していくことの必要性を、『希望』や『われらの詩』をめぐる議論のなかであらためて感じました。

参考文献

＜日本語文献＞
宇野田尚哉「復刻版『われらの詩』解説」『復刻版　われらの詩　第２巻』三人社、2013年
川口隆行「『われらの詩』における試作品―その詩学（ポエティック）と政治学（ポリティクス）―」『復刻版　われらの詩　第２巻』三人社、2013年
高良留美子「『希望』復刻版　解説」『復刻版　希望　別巻』三人社、2012年
小沢節子『「原爆の図」――描かれた＜記憶＞、語られた＜絵画＞』岩波書店、2002年
孫歌「戦後啓蒙における民主主義認識」『社会を問う人びと―運動のなかの個と共同性』岩波書店、2012年

＜韓国語文献＞
権赫泰「被爆体験、被害と加害の間で―原爆詩人栗原と原爆画家丸木」＜権赫泰の日本読み（8）＞、プレシアン、2008年４月22日

金イェリム「冷戦期アジア想像と反共アイデンティティの位相学―解放～韓国戦争（1945～1955）後アジア心象地理を中心に」、聖公会大学東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景１：1940～1950年代』現実文化研究、2008年
白元淡「冷戦期アジアにおけるアジア主義の形成と再編１」、前掲『冷戦アジアの文化風景１――1940～1950年代』
_____「アジアにおける1960－70年代非同盟／第３世界運動と民族・民衆概念の創新」、聖公会大学東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景２――1960～1970年代』現実文化研究、2009年
玄武岩「「ヒロシマ」に対する共感で乗り越える「戦争被害受忍論」」ソナムフォーラム・ニューズレター、2013年８月10日

＜年表・新聞記事検索＞
国史編纂委員会韓国史デーテベース（時代別年表） http://db.history.go.kr/url.jsp?ID=tc
Naver news library（過去の記事検索サービス） http://newslibrary.naver.com/search/searchByDate.nhn#

（そ　ゆな　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）